秋の正遷座祭に勅使御差遣の御治定

宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話　神湊　代表２６番
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目三番三号（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一―九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三三四一（代）～四番
三五一―一三三四・六〇六六番

御神勅の精神ここに顕現

宗像神社本殿遷宮のことについては、特別の思召しをもって、十一月十一日本殿遷座の儀及び翌十二日奉幣の儀に勅使として掌典を参向させられます。

予ねてから、宗像大社御本殿遷座祭に勅使御差遣を請願してきたが去る六月十二日、右の通り宮内庁から御沙汰があった。

天正六年、時の大宮司宗像氏貞によって現本殿が再建されて以来数度の御造替を重ねて今日に至っているが、勅使の御参向は絶えて久しかったのである。しかるに今日、御本殿解体修理をはじめとする御復興諸事業が完成を見る秋、勅使御差遣の御治定を賜ったことは、誠に慶ばしい限りである。

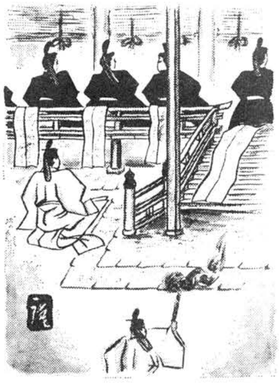
皇祖天照大神が宗像三女神に下された神勅の「天孫を助け奉り、天孫に祭（いつ）かれよ」との御教えが、数千年を経て昭和の御代に顕現されることは誠に皇祖の御神意と皇孫であらせられる畏き辺りの大御心によるものと関係者一同恐懼する次第である。

久保宮司は仮殿に於て、勅使御差遣御治定の栄を先ず神前に御奉告申し上げたのである。

既報の通り、宗像大社の御復興事業は、現在追込に入り、諸工事が急ピッチで進められている。なかでも中心となる御本殿解体修理は、この程完了し創建当時の朱塗りの美しい流れ造りを再現して、十一月の御遷座大祭を待つばかりとなっている。

この度の勅使御差遣の特別の御思召しは、宗像大神御鎮座の精神が、顕現されたものと拝察することができる。

大社の氏子崇敬者一同大いに慶祝する次第である。



絵は福田長庵画伯による古への遷座の儀

皇族御参拝の御例

久邇宮邦彦王殿下	大正十二年五月十四日	辺津宮
久邇宮俔子妃殿下	〃	〃
久邇宮良子女王殿下	〃	〃
久邇宮信子女王殿下	〃	〃
秩父宮雍仁親王殿下	大正十四年二月十九日	〃
伏見宮博義王殿下	昭和四年五月二十七日	〃
閑院宮春仁王殿下	昭和四年十月二十一日	〃
朝香宮鳩彦王殿下	昭和六年十一月十日	〃
東久邇宮稔彦王殿下	昭和十二年六月六日	〃
清宮貴子内親王殿下	昭和三十二年四月七日	〃
東久邇宮聰子妃殿下	昭和三十九年五月二十日	〃
三笠宮崇仁親王殿下	昭和四十四年十月十日	〃
三笠宮崇仁親王殿下	昭和四十四年十月十日	中津宮
三笠宮崇仁親王殿下	昭和四十四年十月十一日	沖津宮

宗像神社本殿遷座祭斎行に至る経過

福岡県宗像郡玄海町鎮座（元官幣大社）宗像神社は、天照大神の御神勅によって御子神であらせられる宗像三女神が皇室守護・国家鎮護の大使命をもって沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、田島の辺津宮の三宮に天降りました社であります。これにより連綿と祭祀が続けられ今日に至っておりますが、往古の祭祀については、昭和二十九年以降数年に亘って実施されました沖ノ島祭祀遺跡の学術調査によって明らかにされ、更に昭和四十四年から再開されました第二次沖ノ島祭祀遺跡の学術調査によって大和朝廷による盛大な祭祀が確認されるに至りました。

歴代の皇室の御尊崇も又極めて厚く、国家の重大事に当っての勅使、奉幣使の御差遣は当社の記録が示すところでありまして、明治四年五月、神社社格制度が定められるに及んで国幣中社に列せられ、明治十八年四月官幣中社に、明治三十四年官幣大社に列格せられました。

当社辺津宮本殿は宗像三社の惣社（三女神の合祭殿）として、奈良朝末期の創建にかかり、後、天正六年に至り、時の大宮司宗像氏貞が炎上の社殿を再興造営したものであって、雄大な五間社流造の様式を具備し、明治四十五年五月二十七日国の特別保護建造物（昭和二十五年国の重要文化財）に指定された社殿であります。

これより先、昭和十七年宗像神社の社殿境域を往古の荘厳な真姿に復原すべく宗像神社復興期成会が結成され営々と復興に努力が続けられてまいりましたが、一昨年からいよいよその計画が大規模に実施されることになりました。

即ち、天正六年以降四百年の歳月によって風雨と白蟻の損傷を蒙った御本殿の解体修理を始めとして摂社及び末社二十二社の大修理神饌所、祈願殿、斎館、勅使館、透塀等の新規造営、駐車場、給水施設、防災施設、植林等の広汎なる諸工事が起こされ、昭和四十四年八月一日仮殿遷座祭を斎行し、現在は本殿以下諸建物の修理造営もほぼ完了し、境内の諸整備が進捗中であります。

全工事の完了は九月末日の予定で十一月には正遷座祭並に完成奉祝の盛典を斎行致す予定でございます。

本殿遷座祭に勅使御参向の御治定を拝して

宗像大社宮司　久保輝雄

かねてから大修理が着工されていた本殿並びに拝殿の工事が、この程めでたく完成し、旧に増した荘厳な威容を拝観することが出来まして、奉仕職員はじめ、関係者一同の感激は一入であります。

これに併行して、宗像大社復興期成会の熱誠なる協賛によりまして、諸施設の建造整備も、順調なる進展を見ております。今秋十一月十一日には本殿遷座の盛儀、翌十二日には奉幣祭を斎行する運びとなりました。

ここに最も感銘深い大事は、右の遷座祭に、畏きあたりの格別の御思召しをもって、勅使御参向の御沙汰を拝したことであります。

去る六月十二日付、宮内庁より文書をもって、本殿遷座の儀及び奉幣の儀に勅使として掌典を参向させられます旨、御通達がありました。まことに関係者一同、これにまさる感激と喜悦はございません。

このことは、関係者一同のかねてよりの熱願もさることながら、当社のなみなみならぬ御由緒について、格別の御思召しを拝するに至ったことと存ぜられます。

天照大神の御神勅によりまして、皇室を守護し奉り、国家の安泰繁栄のため、宗像三女神が御鎮座されましたことは、周知の通りであります。この大使命とも申し上ぐべき根本精神が、長年月脈々としてますます御神威の発揚となっていることは、当神社史の記録によっても明らかであります。

神島たる沖ノ島の多大の祭祀遺品が、古代の荘厳雄大な朝廷の祭祀、上下のただならぬ崇敬を物語っており、史上の幾変転の中、大化改新後全国でも数少い神郡に宗像が定められたことも特筆すべきことでありましょう。宗像の地は、古来より海外交渉の要衝でもあり、国家に大事ある場合の御神威の発動、御神徳の輝かしい歴史は、この度のありがたい御沙汰と思い合せて、一層大神崇敬の念を深める人々も少くありますまい。

ここに関係者一同、御神勅の精神を、愈々敬仰するとともに、勅使御参向の意義をかたじけなく深慮しなければならないと存じます。

勅使・奉幣使・御使、御差遣の御事例

天皇	年号	年月日	記事	目的
応神		四一、二	呉国の皇女を当社に奉遣	朝廷の御崇敬
履中		五、三	車持部を当社に寄せられる	朝廷の御崇敬
雄略		元、二	勅使凡河内直香賜差遣	新羅親征御伺
元正	養老	以前	神郡として宗像郡を寄せられ供祭・造営費俸禄にあてしむ	朝廷の御崇敬
仁明	承和	五、	度僧二名を置き祈請	遣唐使の航海の安全
仁明	承和	九、七、三	奉幣	朝廷の御崇敬
清和	貞観	一二、二、一五	宇佐、香椎と共に差使奉幣	新羅の侵寇防止
陽成	元慶	二、一二、二四	宇佐、香椎、住吉と共に差使奉幣	新羅入寇防止
醍醐	延喜		事ある毎に差使奉幣を定む	延喜の制による待遇改善
朱雀	天慶	三、九、一七	奉幣	山陽、南海道の凶賊防遏
朱雀	天慶	九、五、一五	奉告	譲位のため
朱雀	天慶	一〇、四、二〇	大神宝に預る	一代一度の神宝奉奠
後一条	寛仁	元、一〇、二	大神宝使差遣	一代一度の神宝奉奠
堀河	寛治	元、九、七	奉幣	大嘗会奉幣
堀河	寛治	六、八、二一	奉幣	疫病防遏のため
崇徳	長承	二、五、二八	陣儀を行い造宮宣旨、兼ねて大神宮へ奉告のことを定む	当社の炎上による
四条	天福	元、四、五	奉幣	御即位による
後醍醐	建武	元、一〇、一一	八条院領を当社に管領せしめらる	朝廷の御崇敬
後小松	明徳	五、正、一九	大嘗会用途の段銭を免ず	朝廷の御崇敬
正親町	天正	五、一〇、二四	当社興隆奉加の綸旨あり	朝廷の御崇敬
孝明	嘉永	六、一一、二三	二十九社奉幣に預る	外患祈攘
孝明	安政	二、正、五、九月	三十三社奉幣	外患祈攘
孝明	安政	三、正、五、九月	三十三社奉幣	外患祈攘
孝明	安政	五、正、五、九月	三十三社奉幣	外患祈攘
孝明	安政	六、正、五、九月	三十三社奉幣	外患祈攘
孝明	文久	三、三、四	三十三社奉幣に預る	外患祈攘
孝明	文久	三、三、一一	加茂行幸に際し京都御所内宗像神社に差使奉幣さる	外患祈攘
明治	明治	三、二、九	二十九社奉幣の内中奉幣に列す	朝廷の御崇敬
明治	明治	四、五、一四	国幣中社列格官祭に預る	朝廷の御崇敬
明治	明治	一八、四、二二	官幣中社列格	朝廷の御崇敬
明治	明治	一八、七、一	勅使参向	官幣中社列格奉告祭
明治	明治	三四、七、一一	官幣大社列格	朝廷の御崇敬
明治	明治	三四、一一、七	勅使参向	官幣大社列格奉告祭
明治	明治	三七、二、二三	勅使参向	対露宣戦の奉告
明治	明治	四四、一一、一二	勅使差遣	特別大演習にて九州行幸につき奉幣さる
大正	大正	三、九、四	勅使参向	対独宣戦の奉告
大正	大正	五、一一、一二	勅使参向	対独終戦の奉告
大正	大正	九、四、七	御使差遣	皇太子裕仁親王御旅行中
大正	大正	九、七、二七	勅使参向	第一次世界大戦の平和克復奉告
今上	昭和	一六、一二、一六	勅使参向	対米英宣戦の奉告
今上	昭和	二〇、六、一	幣帛供進使参向	戦勝祈願
今上	昭和	二〇、一〇、一七	勅使参向	大東亜戦争終熄の奉告
今上	昭和	二四、五、二四	今上陛下九州行幸につき幣帛料御下賜	
今上	昭和	二八、三、一五	奉幣	辺津宮本殿遷座
今上	昭和	二九、四、二〇	奉幣	中津宮本殿遷座
今上	昭和	三〇、四、一	奉幣	沖津宮本殿遷座
今上	昭和	三三、四、一七	今上陛下九州行幸につき幣帛料御下賜	

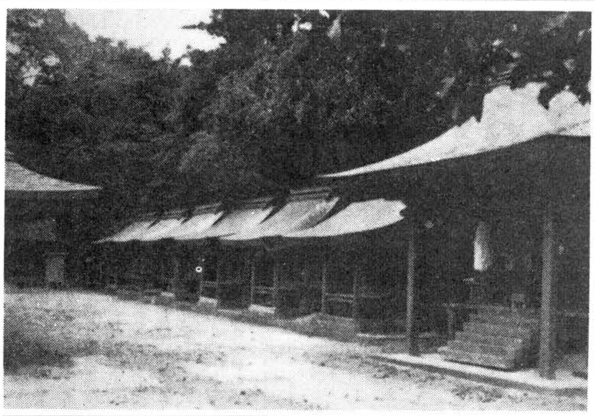
勅使御参向の朗報に接し

工事完成へ熱気こもる

―十七年を経た外拝殿撤去―

当社復興事業も愈々大詰を迎え梅雨空のうっとうしさも、ものかわ、工事は急ピッチで進められているが、此の度の秋の遷座祭に勅使御参向の儀決定という光栄ある朗報に接し、関係者一同の感激もまた一入で、境内は今、工事完成への燃えるような熱気に包まれている。

既報の通り、御本殿の修復工事は予定の二ケ年を経て全工事を完了し、再びその壮麗な姿が拝されているが、これと相俟って、境内摂末社の修復工事も完了した。当社には御本殿を囲んで二十三の摂末社が奉斎されているが、これら社殿の中には約三百年前に建築されたものもあって文化財的にも非常に貴重であり、此の度の復興事業の一環として、昨秋より全棟一斉に修復工事が行われていたものである。この度の修復により、従来の桧皮葺の屋根は、すべて銅板に葺替えられ、また白蟻の駆除、防除が徹底的に行われた。一方、これと併行して、本殿周囲の透塀も、銅板葺に改められ、木部は「あく洗い」により汚れを落し、白木の肌目が一段と鮮やかになった。更に、長らく拝殿に付属して建立されていた外拝殿は、この程すべて撤去された。この外拝殿は昭和二十九年に付設されたもので爾来、今日迄、雨風を凌いで参拝の便宜に供されてきたが、傷みがひどくめだっていた。この撤去により、拝殿に掲げられた「宗像宮」の偏額が、すぐ間近に拝され、拝殿前は広々として、これ迄とは異った感じを受ける。加えて、竣工成った御本殿の壮麗な流造りの重厚さと、これを取りまく摂末社群の整然としたたたずまいは、神社の建築美をよく表わし、参拝者に清新な印象を与えている。



一方、境内参道の整備も着々と行われている。既報の通り、大鳥居移設については、麻生太賀吉氏の御芳志によりその移設が決定し先般、五日間の工程で、解体、運搬、組立てと手際よく作業が進められ、無事、表参道入口に一の鳥居として移転建設を終えた。石造のものでは九州一と謂われるこの大鳥居は、祈願殿と共に遥にその威容を望見することが出来る。次いで、二の鳥居から神門に至る迄約三百五十米の表参道と、これと十文字に交わる形で、左側勅使館、右側斎館を結ぶ参道に、縦三尺、横二尺、厚七寸の御影石七百枚が敷きつめられたが、この石畳の直線的美しさは、新築される勅使館、斎館等の日本建築の美しさを一層引立たせることであろう。表参道沿いの心字池には清澄な水が満々と湛えられ、池の周辺に植栽の樹々の緑は日増しにその色を濃くしている。祓所、手水舎の建設も、屋根の銅板葺を残すだけである。神門脇の透塀も八分通りの出来で、玉垣に相応しく白木の美しさが清々しい。勅使館、斎館も七月中の完成を目指して日夜工事が進められている。

こうした諸工事の活発な進捗状況の中で、去る六月三十日、本殿修理事務所はその任を終えて解散した。昭和四十四年七月、本殿修理の目的を以て授与所裏に開設した同事務所は、岡田貞治郎監督官田原政刀工事主任、屋部憲右主任補佐、本多朝子事務官の四名の文化庁職員により運営され、今日迄の二ケ年間、本殿修理について誠心誠意尽瘁され、幾多の難関を克服して工事の完遂に専念、この度の栄ある竣工と工事報告書作成という貴重な業績を残し、無事任務を終えて解散、新任地に赴かれることになったのである。ここにその御功績と御苦労に対し深甚なる感謝の意を表するものである。

写真上は修復工事完了の摂末社下は外拝殿撤去後の拝殿

論説

女子大学生の参拝

建築業者の話によると、最近は新しく家を建てる人の注文に、内部の構造を和風にする傾向が多くなってきたと。服装や建築その他の生活様式が、便利な合理的な洋風が取り入れられるのは、時代の進展がそうさせるのだが、一面長い日本人の生活の中に伝承されてきた民族固有の美しいもの、慕わしいものへの反省再発見が、心性の何かを呼び覚ましてきたことも考えられる。

古い信仰の歴史を持つ神社仏閣が、争乱盛衰の幾変転の中に、今日に伝えられ厳として存立している事実に、茶道華道の日本的雅味が、庶民に親しまれ続け現代むしろ盛んに返り咲きつつある現実に、若い人たちが単なる復古調と嫌わずに何かを考えてきたことも読みとれるのである。

先日ある女子大学生二十数名が、宗像大社に参拝した。勿論誰からもすすめられたわけでなく、全く学生自身の自発的な話し合いによるもので、この集団参拝に教授一名も誘われて同行する姿も見えた。一行は大社辺津宮で、由緒沿革の概要を聞いた後、本殿に詣って、目下復興工事進行中の境内の諸施設を見て、沖ノ島出土の国宝を主とする宝物館で職員から詳細な説明を熱心に聞いた。更に大島の中津宮へも参拝したいと、計画通り渡航して、帰途は夕刻もかなり晩くなったであろう。

学生は筆者が毎週一回、特殊講義として講義する聴講随意の神道思想史を学ぶ国文科三年生が主であった。単に国文学の参考のための、史蹟見学や文化財研究だけが、その目的でなかったことは後にたずねた参拝の感想が物語っている。

この大学は、特殊の宗門宗派が経営する宗教色を持つ学園ではない。文学長はじめ役員教授が、神道を宗教的に信仰的に教化の対象としているのでもない。筆者が数年前に、この神道史なる科目を依嘱された時、神道を中心としてわが国民の精神史を、学生に学問的に概要を学んでもらいたいとの学長の方針が示された。国文科の主任教授は言葉を足して、国文学の各時代の作品に、神道や仏教の思想が表裏に流れているため、神仏習合思想の発生以来の二教と民衆の生活関係を、特に必要と感じているからとの意見があった。

宗門の経営する学校は兎も角として、一般大学で神道思想史を教科とする例は、極めて少ない。憲法の信仰自由を持ち出すまでもなく、あくまで学問的知識として、日本女性として日本の等常識として、修得すべきであることは講義担当の筆者も心得ている。

さて、宗像大社に参拝した学生たちは、何を感じ何を考えたであろうか。勿論、若い層に共通して言えることであるが、学生に熱心な信仰心から参拝を希望した者はなかったであろう。所謂敬神家もいなかったにちがいない。

「あの神域の持ったたずまいに触れて、先祖の心を感じた。民族のふるさとを教えられた。参拝後の清々しい気持は、神社以外のどこでも得られないものであった」と、最初の感想から次々に若い意見も出た。幾千年変革の多かった歴史の中に、滅びなかった神社は、民衆の信仰の強さがこれを護り通したからだ。為政者の政策でなく、大衆の精神生活が必要としたからだ。氏子の心を結集する中枢となっていた。いつの時代も日本人の心に神があったと。

目下の復興工事の現状が何を意味するか。莫大な浄財が奉献されつつ、荘厳な祭りの出来る施設に復興されつつある姿は、学生たちに驚異や神秘を考えさせたかに思える。浄財を献じて神霊のいます所を、一層美しく清らかにしたいと願う信仰心、そのために惜しまない金品、それは人間の権威や謀計によって得られるものでない。神の威徳だけにその力があると言う。参拝は学生によき効果を与えたことは喜ばしい。

然し、沖ノ島の国宝文化財が、往古あの神島で荘重厳粛な祭りが行われた証左とみる感銘は深いが、この島に女性が上陸できない信仰上の伝承は、異論がありそうである。信仰以外に理屈のない説明も、それを納得させるに困難である。

最近福岡市内の郊外にある住宅地の婦人グループ数十名が集団参拝した。若い主婦もまじる史蹟研究会の集り。この頃叫ばれる文化財保護も、婦人たちがテレビや新聞で見るだけでなく余暇を利用して、神社仏閣などに関心を強めてゆく傾向は結構なことである。

×

阿蒙少言

産業界異色の偉材と云われるある長老が、毎春大学卒の新入社員を迎えると、きまって諭される一言がある「卒業証書を捨てよ」と。含蓄の深い訓示だが、直ちにその真意が腹の底から理解できる若人は少からう。ここを出発点として、その社風の修練が人間を育ててゆく ○採用の基本条件としては、本人を知らない各職場が、学歴に重点をおくのは当然である。一旦職に就いたら、卒業証書や成績表を胸に着けて仕事をするのではない以上、くだらぬ己惚れが障害になってもプラスにはならぬ ○能力・努力が強い責任感に培われて、職務を積極的に遂行させるなら、学歴などがどうであっても問題でない。むしろ点取り虫になって、エリート・コースがゆく名門校を出て、職場では一向に役に立たぬと折紙をつけられ、人物本位が第一だと上司を嘆かせる者も少くない ○就職と結婚とは本質は違っても選考事情がよく似ている。学歴や健康は勿論、家庭・財産・宗教などが加わり、興信所が本人の素行からはじまって、親の地位収入、親族の職業とその不行跡の有無まで、念を入れてくると神さまを、縁談の対象にしてくれと逃げたくなる ○恋愛結婚の場合、昔は虎年だ猿年だと相性を気にしたり、家の系統まで文句つけて、なま木を裂く悲劇を終幕とした例もあった。今日でもその名残りが見られる。忌むべき因習は捨てなければ、人間尊重の精神にも反するし、幸福の建設も難しい。といっても自由奔放の無軌道は、決して新しい時代を飾るものではない ○何にしても不敗の道はただ一つ。剣に負けない道は、剣を捨てることと達人の教えた極意。卒業証書を捨てよと説く大家の佳言も、その心は達人の極意に通ずる。詳しくは当世の教科書など読んでもわかるまい。（白雲）

夏越大祭御案内

恒例の夏越大祭を左記の通り斎行致しますので御案内申し上げます。

記

七月三十一日午後五時
大祓式　夏越祭
八月　一　日午前九時
高宮・総社地主祭
午前十一時
大　祭
八月　二　日午前十一時
大　祭

宗像大社々務本局

崇敬者各位

こうの神湊みなと

(15)

楠　早鳥作
福田長庵画

宗像大宮司　その五

その翌日から若者は大宮司館に出仕した。あてがわれた部屋に大宮司家の所蔵する凡ての典籍を積み上げ、連日それを読み漁った。若い頭脳はみるみる宗像についての知識を吸収し大いなる認識を抱く事ができた。

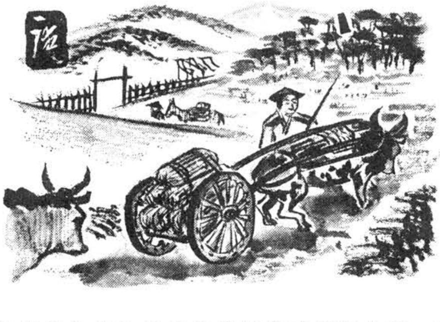
遼遠の古、天照大神の三女神は海北道中に天降り給ひ胸肩君により斎き奉られた。やがて大化の改新によって国郡の制が布かれると宗像郡には大領、少領以下の郡司を置き、大領には国造や県主等の清簾にして時務に堪えるものをもってこれに任じられた。これにより胸肩君の氏人は、そのかみの伝統によって神主として宗像大神に奉仕すると共に、また宗像郡の郡司としてもその行政を執り行ったのであった。その間、注目されるのは天武天皇が大海人皇子の当時胸形君徳善の女、尼子娘を納れ、高市皇子が生誕された事である。都から遠くはなれた九州に根拠を置く胸形氏がこうして朝廷に親近していることは、もともと雄族であったことを察知させるとともに、またそれがその後の勢力の増大に資するところが大であったであろうと思われる。ついで天武天皇十三年十月に八色の姓を定められるや、翌十一月、胸形君は朝臣の姓を賜った。

また天武天皇二年「筑前国宗形出雲国意宇二郡司」に限り三等親以上のものの連任を聴された。元来郡の行政を執り行う郡司は国司と違って地方の名門からの当器の材を選んで任用することとなっていたが、三等親以上のものの連任は堅く禁ぜられていた。そこにあって除外例を認められたことは、郡内に於ける祭政両方面に累代卓越した地歩を占めたことを窺わせて充分なものがある。

宗像大宮司系図によると初代大宮司は醍醐天皇の皇弟清氏親王で正三位中納言に叙任せられ延喜十四年に勅命によって宗像大宮司となり宗像をもって姓とし田島の邑片脇に居宅を営んだと言われている。宗像朝臣は古来の名族であり延暦年間にも神主として宗像朝臣池作の名が太政官符に見えているにもかかわらず平安初期までの家系を一切抛って、平安の中期、延喜年間から家系が起されているのに大きい疑問があるが今日では古伝の消滅により知るすべがない。

大宮司職が設置せられると、一社祭政の権能はその長官である大宮司に帰し神主職の名は表面から消え去っていった。

大宮司が武家化をして行く過程は明らかではないが大宮司家が一族郎党を率い武技を練り、兵馬のことに関与するに至ったのは、他の例から見て源平時代であろうと思われる。そうした頃、大宮司氏実は、源氏の御家人の列に加わり大宮司家の武家的色彩を益々濃厚にして行った。大宮司職の相承も氏実について氏国が就任した後は専らその系統のものが職を襲う例となり他の系統のものは衰退して行った。



その後、武家としての事蹟をとどめたのは大宮司氏業である。これより先、承久の役の後、三浦泰村は幕府により宗像社預所職に補せられていたが、社家は泰村の奔放な社領の領知経営に苦難を嘗めさせられ、氏業は幕府に訴え出たが目的を達しなかった。宝治元年六月、泰村が幕府に謀反を企てた時、氏業はたまたま関東にあり追討のため戦場に駆せ参じ戦功をたて、積年の恨をはらしたのであった。

かくして、武家としての実力は年と共に向上したが、これは未曽有の国難である弘安役に当って発揮せられ、大宮司長氏はその勲功によって肥前神崎荘五町を賜っている。その後、大宮司家は武家体制を益々強化し大宮司氏盛の時には、社家法を設け平事、有事の処し方を規程づけている。これによってみても在地領主としての大宮司の支配力と統制力の強靭さは並のものでない事がわかる。この強大な武力を背景にして大宮司家は南北朝の争乱期を迎えることとなった。

若者の読書三昧の一刻の平穏が九州探題斯波氏経より発せられた早馬のひずめの音に掻き消されたのは、筑紫路に秋色の深い頃であった。「肥後の菊池が大軍を擁して北上しつつある」、急を知らせる狼火が上り、納殿より武器が続々と運びだされ、領内各所の貯水池の水門は固くとざされた。内談衆は、次々に入る諜報により軍議を行い戦略をめぐらした。

その頃、氏俊はひそかに若者を自室に招いた。

平原の彼方から生臭い風が吹いてくる宵であった。

昭和四十五年度監査会及び責任役員会開かれる

標題の如く監査会と責任役員会がそれぞれ六月十五日・十九日午前十時より行われ、両会議とも梅雨間の日差しが心地よい好天気に恵まれた。

先ず監査会は旧斎館に於いて大社費と・氏子会費が厳正に行われた数千枚に及ぶ証憑の調査、台帳照合等女子事務員まで招集する繁忙さで、この監査の結果が役員会に於いて報告されたのである。

役員会は新祈願殿会議室で開催されたのであるが、監査会当日、今秋十一月に斎行される遷座祭並に奉幣祭に勅使御差遣の正式の文書を拝受したので、翌十六日久保宮司は急遽御礼言上に上京し、今朝帰社の予定であるが役員会開始には間にあわぬ旨が葦津権宮司より述べられ開催された。

会は先ず完工も間近い復興事業の概要が述べられた。七月中旬には主要建物が完成し、全工事の九十パーセント完成、又辺津宮境域中津宮境域、沖ノ島全島が四月二十二日それぞれ史跡の指定を受けたこと、更に最大の報告事項は前述の勅使御差遣の御治定が報告され、全役員一同は責務の完遂と光栄とに感激し、お互に手を握りあい早々に祝辞が述べられる次第であった。

次いで昭和四十五年度の監査報告が、立石、中村役員よりなされ、社務本局費、海洋分局費、文化財管理事務局費及び氏子会費等は、それぞれ歳入、歳出とに別け経理課長が読上げ審議がなされた。歳入の面では新祈願殿完成と正月と重り、急激に参拝者が増大し長足の増収となったが、歳出も諸物価の上昇と施設の拡大とで多額の出費を余儀なくされたことなどが報告された。

席上全工事完了、諸施設完備の暁は裏伊勢にふさわしく荘厳な境域となるが、相当なる出費を覚悟せねばならぬ、愈々御神徳の発揚に努力すると共に、冗費のないよう一層厳正にしなくてはならぬ、などが確認された。

（写真上）

当社責任役員会議

話題の新車をみる （五十二）

トヨタ・クラウンの巻

前回にもふれた事由で、「モデル、チエンジは止むをえない」とする日産自動車と、それに影響されるトヨタを始め業界各社の今後の動きが注目されるところである。コロナ、マークⅡと云った、モデルの変更をせまられている車種をかかえてい乍らも、それをおさえるような決定に踏み切ったトヨタのお家の事業の一ツには一ツのモデル、チエンジを行うに約五〇億円もの開発費を必要とすること、次に安全、公害対策が火急の問題であり、特に米国の大気汚染防止法に対処するには会社総動員でこれに当る必要があり、モデルの変更どころではなく、輸出促進の上からも、この問題が解決されねば会社に係る問題であること、等があげられるであろう。だが皮肉な眼で見るならば、自由化に対してカローラのような主力車種、クラウンのような看板車種は三年半と云う短期の間にモデルを国際品並にチエンジして、何ら不安を感じなくなった上での発表ともとれるわけである。今回はこの昭和四十二年九月以来のモデル・チエンジであるクラウンについて紹介したい。この車一ツを見ても、日産とトヨタの方針の決定的とも云える差を見ることが出来る。セドリックは半法人、半オーナーと云ったねらいがあり、クラウンは宣伝にもうたうように、ハイオーナーセダンなのである。あくまでもオーナー向け、これはハードトップに対する成功から裏づけられているようである。外観はようするにタマゴ型、個性あるスタイルと相まって面白いのはカラーバンパーである。開発に当ってのテーマは、空力的にすぐれていること、安全なスタイル、高速性の向上、中型車にふさわしく豪華な車であること、だそうである。その条件をいずれも満たし、豪華さにおいては、セドリック共々、世界に比類を見ないであろう、と云った意味で国際品なのである。

車輌寸法全長4680㎜全幅1690㎜、全高1420㎜、ホイールベース2690㎜最小回転半径5・5m、MD型エンジンは水冷直列6気筒SOHC、総排気量1988圧縮比90、最高出力115PS/5800rpm最大トルク16㎏m/3600rpm

---

柔道場開きに寄せて

本校柔道部は去る昭和三十年、郡防犯協会主催の第一回郡中学対抗柔剣道大会に出場し、剣道部と共に両々初優勝して以来、先輩達のひたむきな精進と練磨の結果、輝かしい伝統をもつに至っている。今まで専用の道場をもたぬため、体育館で練習していた際は、他の運動部と競合し存分の練習ができず、畳の上げ下げにも苦労した。更に普通教室に移ってからは放課後の練習のため、畳ではまたも苦労が絶えず、常に掃除整頓に手間どった。

一昨年、町を初め町内外有志の圧倒的支持により、海辺にもかかわらず郡内中学の劈頭を飾り見事なプールが完成したが、更に江口校長先生以来の宿願の構想は今回柔道場建設に結実し、プールサイドに完成した。

特に柔道畳は宗像大社の御好意により、新品が敷きつめられ、町内有段者からも大きな御支援が寄せられました。改めて町当局を始め皆様の御厚志に深甚感謝しております。

越えて、去る五月二十八日郡中学校春季大会が催された際、玄中では柔剣道大会が行なわれ、柔道場では来賓の御出席を得て厳粛なる神事の後、華々しい充実した試合が展開されました。

大島中を除く郡内五校の柔道部は、それぞれＡＢ二チームを出し、団体戦ではＡＢパートにわかれ、総当たりのリーグ戦を展開したが、玄中はＡＢ組共々郡内の強豪を抑えて優勝し、道場開きにふさわしい華を添えました。

今後は、子供達がこの道を充分に楽しみつつ、健全な心身の持主に育つよう心から成長を見守りゆく所存です。

（玄海中学校寄稿）

沖津宮現地大祭

雨天の為中津宮で斎行

五月二十七日、沖の島鎮座宗像大社沖津宮恒例の現地大祭は雨天の為、止むなく大島中津宮に於いて斎行された。

当社職員は諸準備等の為、前日午后二時の便にて大島に渡島。

二十六日夕刻大島中津宮の「沖津宮現地大祭受付所」には東京、大阪等の遠方よりの信仰厚き方々を始め、同参拝団六〇名全員が受付を済ませ、中津宮神殿に於いての宵祭に参列された。

神前に明日は一年に一度の現地大祭を奉仕する由を奏上、静かにくれゆく中津宮に一同の敬虔な祈りが捧げられた。

祭典後、宮司より沖津宮現地大祭の意義について説明があり、神島についての「掟」が改めて述べられた。

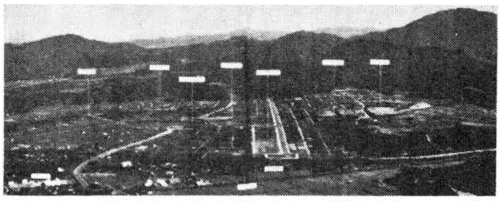
各参拝者はそれぞれ各自の斎宿舎で心静かに時を待った。

しかしながら初夏の天候等には異変が多い。

あれ程迄に空は晴れ、波静かであったのが、俄に雲行きは怪しくなり、夜半より降り出した雨は、風を伴い明方には中津宮社務所の屋根をたたく音も激しく、現地での祭典が危ぶまれたが、一応当社職員二名が艀船弁天丸に乗船し、海上に停泊中の巡視船「くろかみ」の意向を打診、沖ノ島近海は風速十数メートルとかなりの荒天候の為沖ノ島渡島を断念、急遽予定を変更し、午前八時より中津宮で祭典が斎行された。

このように本年度の沖津宮大祭は悪天候で現地での参拝が出来なかったが、来年を期して参拝団は三三五五家路に向った。

来年には、五月のそよ風を浴び鮮やかな青空のもと沖ノ島にて、賑々しく祭典を執行致したいものである。



日の里ニュータウン

九年ぶりに完成

神話と伝統の地、神郡の呼称で象徴される宗像が、ベットタウンとして脚光を浴び出して幾久しい。

これに併行して、新しい町づくりへの意欲、教育文化高揚への気運もたかまり、郡内各町の動きも活発を極めているが、この程、宗像町日の里ニュータウンの完工、津屋崎町の東郷公園に青少年の家が完成したことなど明るいニュースをもたらしている。

日の里団地は日本住宅公団事業としてなされたもので、正式には東郷土地区画整理事業日の里ニュータウンといい、昭和三十八年に調査開始してよりこのかた九年を経て、この程見事に完工したので、その竣工祭が去る五月二十日に宗像大社司祭で斎行され、公団総裁、建設大臣代理、知事代理始め関係者多数が参列した。

この日、斎場に当てられた同タウン東南部の小高い所にあるグラウンドより望む造成地の全ぼうはすばらしく、参列者から絶讃の声がよせられていた。

この事業は宅地の大規模な造成と公共施設の整備改善を図り、住宅と宅地の不足を緩和し、理想的な住宅市街地の建設を目標として施行されただけに、幅員十二mを始めとする余裕のある街路で見事に区画されている。

造成地約二二〇ヘクタールの遠近には豊かに緑が残され、或いは池が水をたたえ、運動施設を有する中央公園、灌漑用溜池を生かした水辺公園、或いは自然の風景を存置する自然公園、加えて、誘致距離二五〇mを標準として、八ケ所（約二万㎡）に児童公園を有し、外にも古墳の形状を保つよう古墳公園（約一万三千㎡）が設けられるなど、理想的なニュータウンである。

また、電気、ガス、水道、下水道の諸施設もととのい、地区内には、土地区画整理事業の土地利用計画により、中学校一校と小学校二校が計画されており、東郷駅前に中心施設用地が定められ、町役場出張所、銀行、郵便局、店舗等ができるようになっている。

総工費約四十億円を日本住宅公団が計上し、関連事業として宗像町他が計上した事業費を総計すると六、七十億円になるという。

これほどの多額の経費と約五ケ年という工事年月を費したこの造成地のもたらす意義は、とりもなをさず、人間中心の新しい町づくりであるといえるであろう。

神郡宗像

摂末社を訪ねて （二十二）

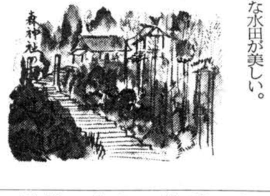
森神社

神湊より津屋崎に至る美しい海岸を右に見ながら、旧勝浦村を過ぎると、津屋崎町大字渡に入るこの渡部落の中心となる丸山に鎮座されているのが、森神社である。県道から見れば、参道の石段が少し見えるだけで、よほど注意して見なければ見おとすくらいである。しかし、この石段を十数段昇ると、思わず立ちどまり、あらためて参道の石段を仰ぎ見るであろう。二百数十余段の石段は、青々と苔むして、参道の両端にせまる巨樹の落葉が積り、初夏の候ですら冷気がみなぎっている。参道の中間に一の鳥居が立っている。右柱に、天長地久諸成就の字が見え、左柱に宝暦二年〇〇〇、とあるが字が定かでない。

当社を神社帳に見ると、

一、祭神、大己貴神。海津見神少彦名命。

一、由緒、不詳。当村字梅津及勝浦村ノ内塩浜村ノ元産神也。例祭九月二十六日、祭神海津見神及少彦名命ハ字池尻ニ無格社楯崎神社トシテ祭祀アリシヲ、大正五年十月六日許可ヲ得テ合祀セリ。とあり、神殿三尺社、拝殿二間二間半石鳥居一基、奉祀勝浦村奏ノ市津屋崎浦巫女、と記されている。



現在は立派な流れ造の本殿であるが、思うに後年改築されたものであろうが、改築については定かでない。境内からは勝浦の里が一望出来き、青い絨氈をしきつめたような水田が美しい。

互選会

下半期兼題決る

宗像大社歌会では、会の活動として、互いに研讃し合い、勉強しようという趣旨で、毎月第三日曜日午后一時より、「互選会」が開催されている。

去る六月二十日（第三日曜）は当社斎館に十数名の会員が集まり六月会が行われたが、当日同会の下半期兼題が左記の通り決定された。

七月　麦酒（ビール）
八月　花火
九月　夜食
十月　夕餉
十一月　テレビ
十二月　冬の風

（この兼題詠草は毎月五日が〆切）

第三回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

名残　竹原　圓
蚊遣り火を焚きつゝ昏れし縁先に風のいでしか風鈴の鳴る

田熊　小野角次郎
もとめ来し風鈴宵の風になり軒を飾りて夕べ涼しき

田熊　小野かをる
新しき玉垣朝日に照り映えて朱の色いよよ光りかがやく

田熊　鷲津かつ代
きんぽうげ明るく咲けり屈託を心にもちていで来し野辺に

福岡　桜井　ツ子
一日の汗を流してくつろげば真平の縁に風鈴が鳴る

徳重　石桜やす子
裏伊勢の御名もかしこき神苑に同好（歌）の友と玉砂利を踏む

田久　立花　勇雄
小魚も住めぬ小川となりにけり農具洗ひし幼日を憶う

曲　天野トモヱ
旅先の四国桂浜に拾ひ来し色の小石を娘は土産にくれる

深田　中野　節子
春山の下刈り終へて疲れしと夫の言ひつゝ蕨を呉れぬ

田島　吉武　武雄
むし暑く寝返りしては風鈴の夢の彼方にかすか聞こえて

田久　小方　実
糖尿病心臓肝臓喘息になやまされつゝ妻は生きいる

福岡　江崎　琴子
さみだれのけぶるひと日を神苑の菖蒲めでつゝ友とまとゐぬ

戸畑　田中　桂一
瞳孔は散大し始めし事故患者下顎呼吸の弱くなりつゝ

戸畑　田中ハツセ
幾度か駄目と思ひし老の患者食すゝみきて笑顔をみせり

武丸　立石ろせ乃
千数百年雨露風雪にたへながら童顔保つ臼杵石仏

津屋崎　占部　由久
病棟を囲みて並ぶアカシヤの花の盛りは闇も匂へり

大井　木原ふさ子
つゆさめの止みて煙れる峡の小田飛び交ふ蛍火淡くうるめり

宗像　中村　幸子
恋ふ如く買ひし石楠花枯れ易きを会ふ人ごとにきかさるるなり

東京　麻生　文子
遠き祖は如何にしてかくつけたりし斎き参らす高宮の名を
（南郷出身・旧姓高宮）

宮田　北原　君子
去年植へしうす紫の花菖蒲大き蕾の初夏の陽に照る

津屋崎　麦野　時雄
渡山わが津屋崎の展望台玄界灘を心ゆくまで

吉武　白木うめの
そらんじる程に読みかへす子の手紙一字一句にあけくれしのぶ

宮田　片山　朔子
減反は暗く覆うも種子蒔きの作業日今朝は疾く起き出でぬ

大井　安部　重郎
三四匹の蝶飛ぶ見れば救われしごとき心地す公害の街

大井　安部　静子
中一日見ぬ間に咲きし紅ばらの露をふゝみて脈打つごとし

戸畑　藤井　孝子
紫陽花の色はうつりに変りゆく朝に夕べに見てし楽しき

宮田　片山　一
九十五の媼の賜ひし蕗の薹妻とかしこみ香り称へる

小倉　伊豆　仁江
御外遊の后の宮にあやかりて秋には母刀自初の空旅

福岡　吉田　信夫
若葉さやぐ也良の岬の草にゐて鴨てふ船の行方を思ふ

福岡　吉田　春子
手づくりのいちごのジャムを壺に入れてすかして見るに色のよきかな

福岡　麻生　初栄
すて苗のいのち萌えたつ午後の日を掘り起しつゝ庭すみに植う

東郷　藤崎　辰子
「とくらや」と云ひし酒屋の屋敷跡畑の中に井戸のみ残る

光岡　河村　久光
刺薔薇の白き花咲く庭の奥燈籠静かに雨けぶりおり

武丸　原田まつよ
由緒ある大村神社に詣でふと吾が宗像大社思ひ出だせり

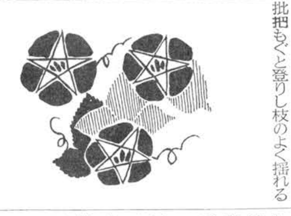
武丸　原田　りの
はるはると来にしにゆくなく仰ぐ姫百合の塔にやさし春の雨ふる

久留米　篠田太郎坊
入道雲湧き出ずるなべに落つる陽の雲の端に燃え海は昏れゆく

宗像大社歌会

俳句作品集（一〇三）

東京　小浦　太平
果実酒の古き日付や春惜しむ
山田市　松尾　米喜
身にしみる人の情や梅雨晴間
福岡　入江　柳江
聖五月夫健やかに誕生日
若松　石松　穂積
槌音のこだます宮居樟若葉
小倉　伊豆　湧泉
老杉にきつゝきの音青葉雨
田熊　安部　ゆき
春の風邪子の枕辺で鶴折りて
東京　小浦　濠介
秩父路のとあるお寺の牡丹かな
東郷　有吉　春子
花吹雪心急かるゝ旅仕度
津屋崎　井浦　良介
人におくれて階段のぼる梅雨の晴間
田熊　小野角次郎
月見草花の開きに端居する
田熊　小野かをる
暗涼や観世音寺の鐘に佇つ
大井　安部　重郎
白頭をならべ春逝くクラス会
福岡　麻生　初栄
久々に雨あがりたり柿若葉
大井　木原ふさ子
満緑や池に山水溢れしめ
久留米　篠田太郎坊
批把もぐと登りし枝のよく揺れる



沖ノ島

宗像神社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十四年度調査報告

島の西南端の柏崎の鼻では黒曜石片と磨製石斧が採集された。この石斧は手法からみて縄文時代のものである。往時「時化知らず」の呼称のつけられている所から少し上るとやや平坦地があり、ここは深く雑草に覆われているが、生活面のとれる場所である。五月二十三日には船で島を一周したが、島の北側は嶮険で断崖が海にせまっていて遺跡の立地には全く適していない。従って先史時代に島の西南部のわずかな平坦部に人々が住み、これは今も昔もかわらぬものがある。

巨岩の累積しているところは、島の西南側面の比較的傾斜のゆるくなった地域にあり、沖津宮を中心とした地域、黄金谷、旧兵舎跡裏の三つがある。黄金谷、旧兵舎跡裏は祭祀遺跡とみるべきものはなく、その中間に位置するやや平坦地のある沖津宮を中心とした地域が祭祀の場所として選ばれやすいと思う。

地形測量は五月十日より日隈が指揮し連日透視のきかぬ原始林の中をくぐり、崖をよじ登り、巨岩をかわして艱難辛苦の測量を重ね、五月二十三日までに東は沖津宮付近より西は大麻畑から柏崎の鼻まで約二十万坪（0.66㎢）を兵舎跡の基礎をベンチ・マークとし縮尺五〇〇分の一で完了した。沖津宮付近の巨岩地域その他の精密測量は本調査時に調査と平行して行なうことになった。

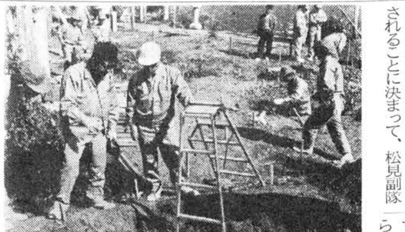
五月二十三日までは大した風雨に会わず作業も順調に進んだが、二十四日は大時化となり作業も出来ず、二十五、二十六日と設営の撤収を行ない、二十六日は全員で沖津宮周辺、参道の清掃を行なう。

二十七日は日本海々戦の当日で、沖津宮の現地大祭日であったが、時化のため参拝団の渡島も取り止めとなり、全員宿舎で日和待ちをした。

五月二十八日午前十時半、漁船二隻に乗船し帰途につき、午後二時大島港に入港、中津宮神職宗像氏の出迎えを受けた。小憩後使船にて神湊に帰宿、直ちに辺津宮に参拝し調査仕務を完了した。

3 第三次第一回沖津宮祭祀遺跡調査

（昭和四十四年九月二十八日～十月二十日）



第三次第一回の祭祀遺跡の調査が昭和四十四年十月五日から開始されることに決まって、松見副隊長以下十九名の先発隊が各種資材と共に九月二十七日出発の予定であったが、天候不良のため一日延期し、二十八日午前九時四十五分神湊を船出した。海上は風はおさまったが、昨日来の余波がひどく、船は白浪にもまれて船には自信のある先発隊員も小さな漁船上で、必死になって荷くずれを防ぎ、いささかグロッキー気味となったが、午後二時すぎ無事沖ノ島に到着した。早速資材の荷揚げと設営にかかったが、今回は三笠宮殿下が現地御視察のため御来島になる予定なので、その宿舎準備の資材もあり、永大ハウスの職人四名共々荷揚げは時間を要し、作業を終ったのは八時すぎであった。

翌二十九日から十月五日までは調査全般の準備が一潟千里に手際よく進められた。給水・給食・就寝施設の準備をする者、携行したプレハブ住宅を建設する者、今回調査を予定した五・六号祭祀遺跡と社務所前縄文・弥生時代遺跡の調査準備や測量をする者等々、各自に与えられた任務に従って作業は進められ、秋の好天気に恵まれて予期以上の成果が挙った。

五日は岡崎隊長以下の本隊が来島する予定であったが、あいにくの時化模様となり出発延期の連絡が無線でもたらされた。空は青一色の秋晴れであるが、この時期玄界灘特有のモンスーンが吹き、海はいよいよ荒れ、一面に白波となって本隊の船を寄せつけそうにもない。遂に夕刻に至って本隊渡島の見込が立たないため、先発隊員だけで予定遺跡の調査をはじめ三笠宮殿下の御視察に対する準備をすすめよ、との無線連絡が本隊から届いた。六日七日と同様の時化が続き、本隊の渡島は引続き延期された。五日に離島予定の先発隊員中の八名は、七日沖ノ島築港工事の黒瀬組残留者と共に荒天をついて沖ノ島を去っていった。

八日久しぶりに荒天はおさまった。正午近く岡崎隊長以下本隊十一名と西日本新聞社溝口記者が来島し、この船便で先発隊員一名が離島した。これでいよいよ作業は核心に入って行く態勢になった。

この日先発隊が調査に着手していた五・六号遺跡から唐三彩片・金銅製品・雲珠等の珍らしい祭祀遺物が続々発見され、隊員を心から喜ばし励ましてくれた。その夜のミーティングはこれ等を中心に大いに話がはずんだ。

かくて九日、十日と調査は滞りなく進み、十日には松本雅明氏・小田副隊長・柳田康雄氏が加わり調査は一段と威力を加えた。

十一日は待望の三笠宮殿下御一行十三名が海上保安庁の巡視艇「いそゆき」で来島された。海水でみそぎの後、沖津宮に御参拝になり引続いて頂上の燈台に登られ、随伴の老神職佐藤市五郎氏（八十二才）より、十六才の折この望楼より目撃した日本海々戦の模様をお聞きになられた。（つづく）

出光佐三一問一答シーリズ (59)

働く人の資本主義

世界各国から鉄鉱石を安い運賃で持ってきて、日本の海岸にある製鉄所で製鉄して世界一安い鉄をつくっている実状です。アメリカなどは工場が鉄鉱石や石炭を産出する奥地にあったりして、製品を海岸まで持ってきたときの価格は非常に高いものになっている。イギリスの場合でもそうじゃないですか。石炭の産地に工場があったので海岸に出すまでに運賃がかかり、コストがあがるということでしょう。その点日本は各国の海岸から鉄鉱石等の原料をもってきて、海岸にある製鉄所でつくるのですから、いちばん合理的です。資源のないことは、日本の鉄鋼業にとってもう弱点ではなくなった。

そういうことから、日本の産業は資源を世界各地から輸入貯蔵し、製造工場も充分に持って、供給を豊富にすることが必要です。この場合に、供給が豊富になったからといって、価格が下落するという経済原則にまかせておいてはいけないということなんです。価格は供給者が自主的に合理的に決めていかねばなりません。この合理的というのは、自力を養成して消費者に尽くすということが前提です。仕入れとか輸送とか、あらゆる面に努力して合理的に経営して自分の力を養い、そしていいものをつくって安く供給して消費者に尽くすというのが、主要産業に従事しているものの心得と思いますね。国家全体のためにある企業であり事業経営である、という自覚と責任が心要です。

質問　いま、価格は業者が自主的に決めるといわれましたが、業界のなかでは実力のある会社も実力の弱い会社もある。その場合に、実力の強い会社が自分の立場だけから「おれのところはこの価格で充分やっていける」ということで安い価格を出すと、ほかの弱い会社はつぶれることにもなりかねないと思いますが、いかがですか。

出光　つぶしてはいけないので、業界の全体的立場に立って決めることが必要です。さしあたっては非能率な工場がつぶれないような価格に右へならえすることは、一時的あるいは段階的に必要でしょうね。しかし、本筋はあくまで自分の価格は自分で決めるという道を歩かすことです。あまり価格を下げて赤字を出していると、株主総会でやかましく言われますよ。また、そう長くは赤字も隠せませんから、しだいに自分の経営の立場から適当な価格を出すようになってくると思います。

あなたがたは、実力の強い会社が安い価格で売ってるように思われましょうが、石油業界の場合、実際は違いますよ。最も非能率な会社がいちばん安く売っているんです。自分からつぶれようとする会社は、つぶれさすのがほんとうでしょうけど、政府がいつまでも保護してちょっかいをかけるから、なかなかほんとうの価格が出てこないですね。

2 合併問題と企業の社会性

質問　最近の大型合併についておうかがいしたい。合併の大義名分として一般に言われていることは、世界的な資本、貿易自由化の趨勢のなかで、国際競争力をつけることが至上命令となっている。そのためには重複投資をさけたり、むだな管理部門を削減したりして、効率的な経営をやっていくことが必要だという主張です。ところが一方合併は競争を制限し、価格をつりあげるから、国民経済的にはかえってマイナスであるとして、反対する有力な意見もあります。これらについて、出光さんはどのように考えておられますか。

出光　合併問題を一般論で言っても意味がないと思いますね。個々のケースで考えていかなければいけないと思う。それぞれ会社には社風というものがあるから、社風の違った会社が合併したら、対立闘争して、かえって非能率となって、けっして強くはならんと思うんです。たとえば、われわれのように人を育てるという会社と、金もうけだけに走る会社とが合併したら、マイナスにこそなれけっしてプラスにはなりませんよ。

それから石油業界の場合でいえば、中小会社が合併する場合に、三万とか五万バーレルといった個々の小さな工場を廃棄して、新たに十五万とか二十万バーレルといった大きなものをつくるのでなければ、合併のメリットはありません。ただ、小さなものを寄せ集めただけでは、寄り合い世帯で、力の強いものにはなりません。合併に反対する意見は、市場を独占して暴利をとりはしないかということでしょうが、もうそういう時代は過ぎていますよ。昔、明治、大正時代の私どもが事業をはじめたころは、事業とは金もうけである、買い占め、売り惜しみをやって金もうけをするのが事業であり、そういう目先のきいた事業家が偉い事業家であると言われていました。しかし、今日ではもうそういう古い考え方は通用しませんね。もしそういう経営者がおるならば、それはもう失格ですよ。

結局、今日のように国際競争力が求められる時代においては、社風の同じところが合併して能率を上げたりコストを下げたりすることは、当然やるべきことだと思います。

質問　もう一つ大型合併反対論の根拠としてあげられていることは、大型合併によるコストダウンのメリットが大企業に吸収されたまま、消費者には還元されない恐れがあるという点です。企業は能率を上げ、コストダウンして消費者の利益をはかっていくことが社会的使命であると思いますが、出光さんは企業の利潤性と社会性をどのように考えられますか。

出光　利潤がよく問題になるようですが、私の利潤についての考えはこうです。前にも話したように、人間はお互いに助けあわなければならない。ところが人を助けるためにはまず自分の力を養成することが先決でしょう。企業であれば、その力を養成するために利益をあげなければならないということなんです。しかし、その利益を得るために人を害してはなんにもなりませんよ。先に人を害しておいて、あとで助けるということはないですよ。たとえば、金の力によって買い占めや売り惜しみをやり、消費者に迷惑をかけて、もうけた金で人を助けるなんて意味ありませんからね。

まず、自分が努力して合理的に働き、またいろいろな見通しや計画なんかもうまくやって、人に迷惑をかけないで利益をあげて自力を養成する。その力で人のためにも尽くすというのが、互譲互助のあり方だと思いますね。世間では利潤の追求というがこの追求などという言葉がいかんと思うんです。利潤は尊重しなければならないが、人間がその奴隷になってはいけませんよ。

それだから、消費者の価格を決めるに際しても、自力養成のためにやみ価格で暴利をとらないと同時に、赤字を出すようなこともしてはいけないということなんです。企業の社会性を実行しながら、自力を養成するために得るものが利潤であり、自力をつけてまた社会性を実行するということですから、私は社会性に反するような利潤を考えたことはありません。

前にもお話したように、出光は、内池先生の生産者と消費者の間にただ一つ介在して、両者のために尽くすという教えから出発しています。出光の事業の社会性とは、消費者にいいものを安く提供する。いかなる場合にも、石油は私どもにまかしておいてください、けっしてご心配はかけませんという供給の安定にある。これがほんとうの社会性だと思うんです。その社会性を実行するためには、自分が放漫な経営をやっておっては駄目であるから、真剣に真面目に努力して利潤を得なければならない。私は利潤と社会性は対立しないと思いますよ。

（つづく）

――宗像藪庵先生百話――

南方　華やかなりし頃

宗像太郎坊

混血児

日本人のトアン・ブッサル（大旦那）の間にもある。軍人はなかなか、そのチャンスがなかったが軍政部の人達は立派なオランダ人の空家に入って、ネシア人のバブー（女中）をおき、ふんぞり返っていたが、このお歴歴がちょっかいをかけられる。女中の方も戦勝国の旦那なら損にはならないとおまかせする。この頃、早製造された子はもう満二歳になっている。誰かに似た子が母親のもとで、跣で歩いている訳である。昭和二十一年二月シャンタルの近くに集結して帰還の船を待っているとき宿舎の周囲を子を連れてうろうろしている女を多数見かけた。これはたしかに、あの人の子であると思われる顔の子を見ると、人ごとと は思われず涙が出る。日本人が引上げた後は、裸で、跣で、夜が来れば竹床の上にごろりと寝ているのかと思うと、同じ日本人の子として胸をしぼられる。

その子供達も、終戦の年に生れたとしても、もう満十九歳。メンデルの法則で親父そっくりの手くせの悪い青年が何処かを、のし歩いている筈である。女なら南洋ではもう人妻、子が四、五歳になっている筈である。日本の隅で胸に一もつある親父が孫まで出来ているのも知らずに、今の家内にはどうして子が出来ないだろう。子がなくては人生に生きがいがないなど、家内にこぼしている。

父親が誰であるか、認定する古事がある。風土記の播磨国の部に「道主日女命という女神が、父のわからない子をお生みになった。それで父が誰であるかを知るために、神に祈誓して、酒を造ろうと思いたち、田を七町作ったところが、七日七晩の間に、稲がすっかり実のった。そこで大勢の神々を集めて、その子に酒を献げさせて、もてなした。するとその子は、天目一命にその酒杯をさし上げたため、その神が父親であることがわかった」とある。

昔、ある田舎で地位の高い男が、女の私生子をうませた。親がこの子を引きとることを許さなかったが、ちょうど隣村に子のない正直な夫婦がいたので、そこにくれてやった。娘は今の父が本当の父だと思って成長し年頃となった。そして或年の秋祭りに、本当の父親が、娘はもう年頃だがどんなになったろうと立寄ってみた。その家の夫婦からはようこられましたとばかり座敷に通されご馳走が運ばれて来た。昔は、鮨を行水盥のような大きな物に盛ってこれから各自につぎ渡したものである。そこへ自分の本当のお父さんとも知らず娘が出て来て、鮨の入った盥を、かたかたいわせながら、端の方ばかりを掻き集めるようにして皿についでさし上げた。本当のおとうさんは心の中で「可愛さ余って憎さ百倍、このまことの父親に、端っこのふりかけの少ないところばかりを掻き集めてつぐとは……」と、このお父さんついに「もっと礼儀を見習え」と怒鳴って了った。普通の者だったら、他家でこんな失礼な言葉は使えない筈である。娘は貧乏住に育ったとみえて、端の方からつつましくついでいっただけのこと、本人はなんのために怒られたのかわからなかった。これは風土記の酒でなく、鮨を差し上げて、父親を見破る方法である。

日本で子が親を捜すことで有名な戯曲は近松半二作「傾城阿波の鳴門」である。

（つづく）